

父が遺してくれたもの

校 長 武井 正明

先週、父が旅立ちました。

いよいよだと、私が初めて付き添いで泊まった夜明けに逝きました。

先生方が学校をしっかりと守ってくださり、皆さんも大過なくすごしてくれたので、私は安心して父を送る事ができました。吉中野球部の北信越出場という、素晴らしい冥途の土産も持って、今頃は母や兄弟に会って報告していることでしょう。

そして、私は数日振りの吉中の朝です。皆さんの「おはよう」と笑顔が、私には心なしか、いつも以上に優しく感じられます。私の吉中赴任を喜んでくれた父が、上から安心して見ていられるように、また今日から気持ちを引き締めて、頑張ります。

皆さんの中で、おじいちゃんやおばあちゃんのご健在の人は多いと思います。

もちろん、できる限り長生きしていただきたい。ただ今回、父親の旅立ちに際して感じたのは、人には神様が決めた寿命があり、その与えられた時間の中で一生懸命に生きることが、またその人生の長さだけではなく、いかにその時間を充実して輝かせることができたかが、とても大切なのだということです。

葬儀を終え自宅に戻ると、父の遺したものが山のように出てきました。

家族や親戚、世話になった人、亡き母への感謝の言葉でいっぱいの子供の日記は、母が亡くなった2008年から先月5月3日まで続いていました。

「俺はバカだから」が口癖だった父。カレンダーや広告の裏に、新聞や雑誌、テレビから得た情報を、国語辞書で調べた勉強の跡。この姿勢は決して馬鹿じゃない。いくつになっても学ぶ意欲に溢れた、誇らしい足跡だ。

そして、大昔から撮りためられてきた、おびただしい数の写真、アルバム…。

私と弟の通知表、大学の合格発表の記事（当時は合格者の氏名を掲載していました）教員新採用、私が出していた学級だより、野球部だより、学校だよりがきれいに綴じ込んで、保管されてあった。

最初は（こんなにあるのか…）と溜息が出たが、一枚一枚見ていくと往時が思い出され、親父の人生の歴史を辿っているようで、父と一緒に傍で見ているような、懐かしい気持ちになった。親戚関係の写真も総てラインで送った。長年眠っていた写真が、今甦った…。

最も嬉しかったのが、幼い頃可愛がってくれた従妹の方からの返事。

「父が写っている家族写真は1枚もなく、驚きました。48歳で逝った父との家族写真はすごく嬉しいです。宝物です」親父もきっと喜んでいることだろう。

私を風呂に入れている写真も出てきた。まさに私が娘を入れている写真と同じ。親父の後ろ頭から、懐かしい笑顔が浮かんできた…。

ゆっくりと、さよならしようと思います。